

深イ～話！

No.58

——山元加津子「お兄ちゃんを守る決意」——

しんちゃんのご家族とはしんちゃんが卒業した後もお付き合いがあり、その日、山元先生は夕食に呼ばれました。

しんちゃんには中学生の妹えみちゃんがいます。ちょうどえみちゃんが帰宅したところでした。えみちゃんはお母さんから「お兄ちゃんと夕食の餃子の材料を買ってきて」と頼まれます。「お兄ちゃんと一緒に行くとは恥ずかしい」とえみちゃんは渋い顔です。それで山元先生と3人で買い物に行くことになりました。

しんちゃんはどんな言葉にも返事をする子でした。たとえば学校で先生が「トイレに行ってください」と独り言を言います。すると「はい、そうです。トイレに行ってください。我慢はよくありません」としんちゃん。「えーと、今日の予定は・・・」と先生。「カレンダーをめくったらどうでしょう？」としんちゃん。こんな具合です。

さて、3人でスーパーに行きました。レジの人が「毎度ありがとうございます」と言うと、すかさず、「毎度は来れないです」としんちゃん。

少し驚いた顔でレジの人は読み上げます。「ニラ、238円」。すると、「ニラは238円でございます。間違いございません。」としんちゃん。「ひき肉、388円」とレジの人。「ひき肉は388円でございます。餃子に使います」としんちゃん。

レジの人が恥ずかしそうな顔をしていたので、えみちゃんがたしなめる口調で「お兄ちゃん！」と言いました。

後ろに並んでいたお客さんが、「えらいわねえ。お兄ちゃんがこんなふうじゃ大変ね」と言いました。

その時、えみちゃんが返した言葉に山元先生は衝撃を受けました。

「大変なんかじゃないです。兄はただどんな人に対しても返事をするんです。兄のしていることは人間として当たり前のことです」

山元先生は中学校時代のしんちゃんを思い出しました。当時、えみちゃんはまだ就学前で、お兄ちゃんをととても慕っていて、転んだ時やお菓子の袋が開けられない時、お兄ちゃんに助けてもらっていました。

山元先生はその言葉を聞いて思ったのです。「大きくなったこの妹は、お兄ちゃんに何かあれば、今度は私が守ってあげると決意しているんだなあ」と。

